

〔第14回学術集会特別講演〕

人はみな、育てられて育つ

中央大学心理学部

鯨岡 峻

1. はじめに

一人で生まれ、一人で育つ人はいません。人はみな、両親から命を引き継いでこの世に生まれ、周囲によって育てられて育ちます。見方を替えれば、子どもの成長の初期には、常に養育してくれる家族との関係を生きなければならないということです。ところが、その家族の生の営みは、お互いに幸せを目指して共に生きるにもかかわらず、葛藤を孕んだ、幸せから不幸せまでのスペクトラムのあいだを揺れ動く営みです。なぜ、私たちは家族の一員としてみな幸せを目指しているのに、その葛藤から解き放たれないのでしょうか。

そのように問いを立てるとき、そこには人間という存在が本来抱えている自己の内部矛盾という問題と、人間の生涯過程が〈育てられる者〉から〈育てる者〉に移行する中で家族関係が営まれるという問題に行き着きます。私はそれを大きく「関係発達」という概念で掬い取ろうとしています。本日はこの概念の柱をなす考えを紹介してみたいと思います。

II. 人間は内部に自己矛盾を抱えた存在である

家族など身近な間柄にある人と人の関係は、自分が主体であるように関わる相手も主体であるという奇妙に振れた関係です。そもそも人間は、一方ではどこまでも自分を貫き、「自分は自分」「私は私」を貫きたい存在です。しかし他方で、人間は常に誰かと繋がってこそ、幸せや安心を感じ、それゆえ常に他者を求めずにはおかない存在です。私が私である

ためには、あなたに私を認めてもらう必要があります。あなたに依存しなければなりません。しかし、これと同じことが関わる相手の側にも起こっているのです。

このことはつまり、私という主体が内部に自己矛盾を抱えていること、そしてそれは私ばかりでなく、あなたもそうだとすることを意味します。

このことを示したのが図1です。図1の一方において、「私は私」というように自分を貫くことに向かう傾向を自己充実欲求を中心に向かうベクトルで、また相手を尊重し、相手とよい関係を築くことに向かう傾向（整合希求性）を外に向かうベクトルで表現しています。

この両方のベクトルが逆向きになっているところに、人間が自己矛盾を抱えていることが表現されています。私もこうした自己矛盾を抱えた主体ですが、あなたもそうなのです。

そういう主体と主体が関係をもつとき、それが親子の関係であれ、男女の関係であれ、あるいは夫婦の関係や「保育する－される」「教育する－される」「看護する－される」という関係であれ、あらゆる人と人の関係は、それぞれが自己矛盾を抱えているところから、まさに文字通りの喜怒哀楽が生まれず

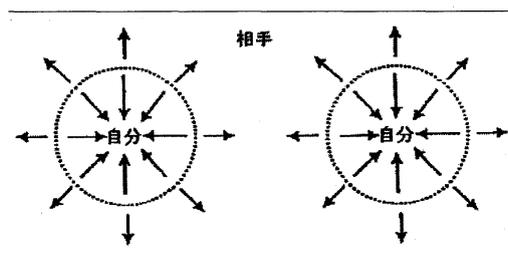


図1. 内部に自己矛盾を抱えた主体と主体の関係

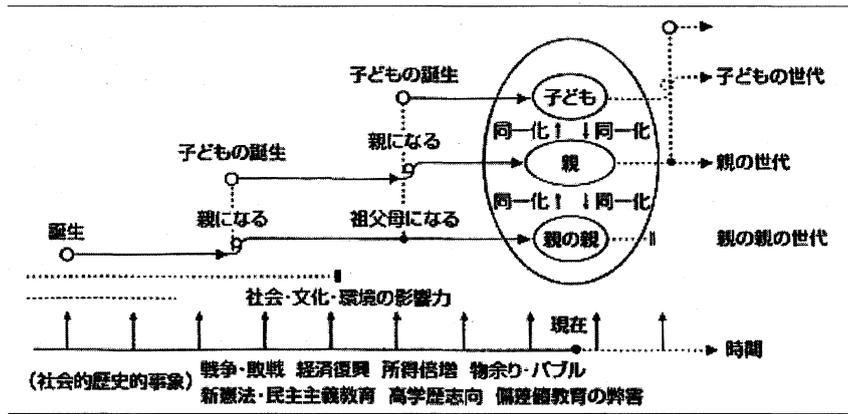


図2. <育てられる者>から<育てる者>へ：関係発達概念図

にはおかない関係だということが見えてきます。そこに、幸せから不幸せまでのスペクトラムが生まれてくる理由があります。

私は家族関係など、身近な対人関係はこのモデルに沿って考えなければ、そこになぜ喜怒哀楽が生まれるかを理解できないと考えています。子どもが家族の中で育てられて育つという問題を考えるときも、その根底にはこのモデルがしっかり位置づけられているのでなければなりません。この図1が「関係発達」という考え方の1本の柱です。

III. 新しい発達の見方：

<育てられる者>から<育てる者>へ

次に、「関係発達」の考え方の発達の面に触れてみます。これまでの発達の見方は、基本的に「子どもから大人へ」という見方、つまり、誕生した赤ちゃんに「できること」が次第に増えて大人に近づいていくという事実を中心に組み立てられてきました。しかし、日常生活に立ち返ってみると、子どもが一人だけで生きていくなどということはありません。子どもは家族をはじめ常に周りの大人との関係の中で成長を遂げていく存在です。言い換えれば、子どもが「育つ」という事実は、大人の「育てる」という営みを離れては生じ得ないものだという事です。私は、大人の「育てる」という営みと、子どもが「育つ」という事実とを、常に「育てる—育てられる」という関係において考え、この関係そのものが

時間軸の中で変容するという事実に着目してきました。これが「関係発達」という考え方の出所だといってもよいと思います。ここから、従来とは異なる新しい発達観が導かれます。これを要約すれば、各世代の生涯過程が「育てる—育てられる」という関係の中で同時進行し、しかも世代間で循環していくということです。

これを図2で説明してみましよう。

関係発達という考え方は、図2に示すように、1つには、各世代の生涯過程が相前後する世代の生涯過程と「育てる—育てられる」という関係において結びつきながら同時進行する事実（図の楕円が時間軸を動く事実）を掬い取るものです。これはさらに以下の3つに視点から整理することができます。

1. 命が世代から世代へとリサイクルしていくという視点

図2は、子ども、親、親の親という3世代が関わり合いながら（必ずしも同居しているという意味ではない）、それぞれにその生涯過程を同時進行させていっている事情を示しています。同時にそれは、前の世代から命を引き継いで誕生した個が次世代に命をバトンタッチするということの反復、つまり命が世代から世代へと循環していく事実を描き出してもいます（これは家族の生成とその展開という意味をもつ）。

2. 個の生涯に見られる変容の構造が世代から世代へと循環していくという視点

図2は、誕生後、<育てられる者>として成長を

遂げた個が、次には〈育てる者〉として次世代を育てる側にまわり（図では右に進んできた線がそこで一回転して、少し違った軌道を進む形で表現されている）、前の世代を介護し、看取って、最期には次世代に介護され、看取られて死を迎えるというように、一人の人間の生涯過程を貫く一般的な変容の構造が世代から世代へと循環していく事情を示しています。このような構造的変容を含む人間の生涯過程は、これまでのような「子どもから大人へ」という定式化ではなく、むしろ「育てられる者から育てる者へ」という形で定式化すべきものだと思います。

3. 文化が世代から世代へと循環していく視点

図2の楕円内は少なくとも三世代（つまり家族）が「育てる－育てられる」という関係において関わり合い、影響を及ぼしあうことを示しています（楕円内の→で表現されている）。その「育てる」の本質は、自分が育てられてきたことを次世代に移入するという文化伝達にあります。保育や教育の営みも基本的にはそうです。それが世代から世代へと循環するというのも（完璧な循環にはなりえないにしても）、図2の意味です。

この図2にまとめられていることが「関係発達」の第2の柱で、これは家族の生成、発展、消滅の過程を表しているといえます。

IV. 各自の〈自分の心〉は共に生きる他者たちとの関係の中で変容する

次に、関係の中で生きる個（子どもや親）に注目するとき、各個はその関係の中で唯一無二の〈自分の心〉を形づくりながら、しかもそれを時間軸の中で変容させていっているという事実が浮上します。これを私は各自の〈心の発達〉ないしは〈心の育ち〉と要約してきました。ここに〈自分の心〉というのは、「自分は愛されている」「自分は愛されて当然の存在だ」「自分には自信がある」「人は信頼できる」等々の、自分が自分自身や周りの人について抱くイメージを中心に組み立てられています。その成

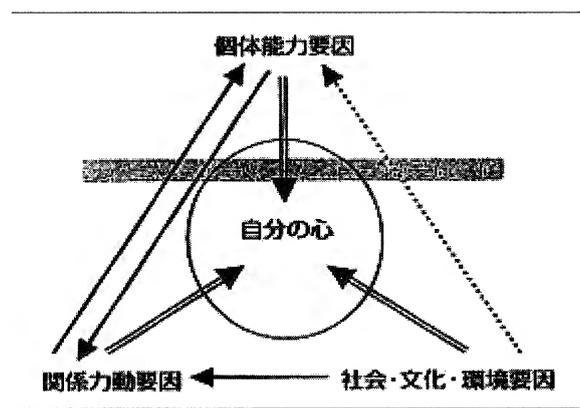


図3. 〈自分の心〉に流入する3つの要因

り立ちの経緯を考えると、この〈自分の心〉は、自分の能力について自己理解（私はこんなことができる、私は何をやってもだめだ、等々）を含みながらも、基本的には周囲の人の評価（映し返し＝可愛い子、ダメな子、等々）を自らの内に取り込むことによって成り立つものだということが分かります。つまり、〈自分の心〉は自分のものでありながら、周りの人との関係を媒介することなくしては成り立ち得ないという逆説を抱えているのです。ここに、「個」を見るだけでは不十分で、「関係の中に生きる個」という視点がどうしても必要になる理由があります。図3はこうした考えを図解したものです。

この図3に示すとおり、関係の中に生きる個（例えば子ども）に定位するとき、その個には個体能力要因、関係力動要因、社会・文化・環境要因の3つの要因が影響を及ぼし、それらの3つの要因はすべて個の〈自分の心〉に流れ込んでいるのが分かります。

図3の関係力動要因は、「愛する－愛される」「信頼する－信頼される」「愛せない－愛されない」というような、〈育てる者〉と〈育てられる者〉との心と心の関係によって構成されるものです。言い換えれば、〈育てる者〉と〈育てられる者〉との関係は、単に「世話をする－世話をしてもらう」といった行動上の相互作用に還元して考えることはできないということです。

図3の社会・文化・環境の要因は、常識や社会通念、あるいはさまざまな価値観や規範など、目に見

えない共同主観性が個の主観性に潜り込む形で影響を及ぼしている事実をいうものです。そうした共同主観性が〈育てる者〉や〈育てられる者〉の欲望のあり方や意識のあり方を強く支配するとともに、〈育てる者〉の子育てのありように深く入り込み、〈育てられる者〉をどのように社会化するかに影響します。そしてそれらが個の〈自分の心〉に流入するのです。

以上の図1～図3の3つの柱の下に組み立てられるのが「関係発達」という視点です。

V. なぜ関係発達の視点が保育や子育てや看護に必要なのか

これまで見てきた関係発達という見方に立てば、次のような問題に光を当てることができます。

1. 子どもの心を育てるという視点が切り開かれる

これまで、健常な子どもや障害のある子どもの発達には、基本的に能力の発達とみなされてきました。それゆえ、保育や教育の課題も、これまでは身辺自立、言語獲得、社会性の習得が強調される一方、集団生活の中で子どもがどのように集団に馴染むか、どのように集団のルールを身につけ集団の流れに乗れるようになるかというように、行動次元での「あるべき発達の姿」に向けて大人（保護者をはじめ、療育者や保育者や教師）がどのように働きかけるかという文脈で考えられてきました。要するに、一人ひとりの子どもが能力を完成させていく過程が発達であり、それをどう支えていくかが大人の役割だとされてきたわけです。

しかし、これまで述べてきた「関係発達」の考え方を踏まえてみれば、単に集団の流れに乗れるか乗れないか、身辺自立ができているかどうか、社会性が身につけているかどうかというように、個の能力発達を考えるだけで子どもの発達を考えていけないことは明らかです。能力の定着が不十分、みんなの流れに乗れない等々の能力次元の問題を取り沙汰する前に、元気がない、表情に乏しい、自分勝手だと

いった子どもの「心」の問題が深刻な形で浮上してきているのです。こうした現実を踏まえるとき、まずもって、その子がどんな世界を生きているか、その子の心の中にはどんな感情や観念が渦巻いているかというように、子どもの心の育ちを考えてみる必要があります。

1) 他者との関係において成り立つ子どもの心

先の図3でも少し説明したように、自分の心はあくまで自分ものです。しかし誰しも、自分の心のありようを自分一人で作り出すことはできません。自分の心のありようは、周囲にいる人たちが自分をどのように映し返してくれるかに懸かっています。自分の心に自信があるとすれば、それは単に自分がいろいろなことができるからではなく、むしろ周りの人が自分の存在を認め、大事にしてくれ、時には賞賛を与えてくれるからです。

実際、人は「人間」という言葉が示すように、周囲にいる人と「共に生きる」他はない存在であり、共に生きてこそ幸せを感じる存在です。けれども、その周りの人たちが自分をどのように扱い、どのように映し返してくれるかによって、自分が幸せに生きることができるかどうか、つまり自分の心の中に自信や自尊心や人への信頼感がしっかり宿るかが決まるのです。その意味で、人の幸せや不幸は、特に幼児の場合、共に生きる周囲の人たちがその鍵を握っていると言わねばなりません。

2) 健康な自己愛や他者への信頼という心の育ちの大切さ

通常、乳児は慈しまれ、大事にされて育てられます。授乳やオムツ替えや沐浴などの身体的なケアが必要なことはいうまでもありませんが、それよりもむしろ、愛されているかどうか、大事に思われているかどうか、可愛いと思われているかどうかなど、自分に関わる周囲の大人の思い（主観的なもの）が一人の子どもの心の育ちには決定的に重要です。なぜなら、その周囲の大人の思いが子どもの心の中に染み込む結果、自分は愛されている、大事にされて当然、自分は可愛いのだ、という形でその子の健康

な自己愛（自信）や人への信頼感が育まれたり、あるいはその逆に、自分は駄目な子、愛されるに値しない子、誰からも守ってもらえない子という形で、その子の自信のなさ（健康な自己愛の傷つき）や人への不信感に繋がったりするからです。この健康な自己愛と他者への信頼感は、人が人と共に生きるしかない人間にとって、もっとも根本的な「共に生きる」ための基礎条件とさえいえる重要なものです。昨今の青少年非行がどのようにして生まれるかを念頭におけば、このことの重要性はいうまでもないところではあります。

3) 心の育ちと自己イメージ、重要な他者イメージ

自分にとって重要な人との日々の関係の中で、自分の中に、自分自身についてのあるいはその重要な人についての観念（イメージ）が出来上がってきます。例えば、個々の場面で優しい扱いを繰り返し受けることを通して、子どもはそのように優しく扱ってくれる人や優しい思いを寄せてくれる人に対して、「優しい人」「信頼できる人」「いつも守ってくれる人」というような肯定的なイメージを形作ることができるようになります。逆に、ぞんざいに扱われる頻度や投げやりな態度で扱われる頻度が全体として優位であれば、その子はその相手に対して全体として否定的なイメージを形作ることになるでしょう。

そして、関わってくれる大人に対してそのような肯定的ないし否定的なイメージを形作るのに対応して、「自分はそのように優しく扱ってもらって当然

の子ども」「自分は可愛い子ども」「自分は守ってもらえる子ども」というように、自分自身に肯定的なイメージを抱くことができたり、あるいはその逆に「自分は可愛がってもらえない子」「自分は大人の愛に値しない子ども」「自分は守ってもらえない子ども」というように、自分自身に否定的なイメージを抱いたりするようになってくると考えられます。

この間の事情を示したのが図4です。

このように、子どもは大人の対応によって自分への肯定的なイメージや、否定的なイメージを抱くようになるという事実を踏まえれば、昨今の少年や青年の嘆かわしい行動の由来も理解できるものになるでしょう。その意味からも、子どもの心の育ちは「育てる」営みにおける最重要課題なのだといえます。

2. <育てる者>もまた人生における成長の途上にあることが見えてくる

これまでの発達への考えには「育てる」という視点が含まれていなかったといっても過言ではありません。それは子どもの「育ち」を客観的に取りおさえることのできる能力の向上という枠組みで捉えようとしてきたからです。しかし、これまで述べてきた「関係発達」という視点に立てば、子どもの誕生間もないころ、<育てる者>もまた、<育てる者>として未熟なのであり、子どもを育てることを通して、自らも一人の<育てる者>として、あるいは一人の社会人として「育てられ-育つ」といわねばなりません。つまり<育てる者>は最初から完成された<育てる者>ではなく、人生の途上にあって、これから次第に<育てる者>になっていく人なのです。

こうした考え方に立ってのはじめて、子育て支援、つまり<育てる者>である親への支援が必要だということが理解できるようになり、単に子育ての肩代わりをすることが子育て支援ではないことを理解することができるようになります。例えば、親が自己中心的で周囲を顧みない現実も、子どもを育てるといふ構えを十分にもっていないという現実も、単にその親が例外的に悪い人なのだといふ捉え方ではな

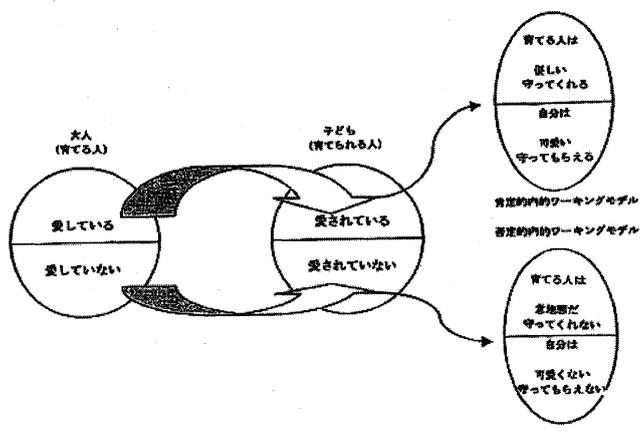


図4. 自己イメージ、他者のイメージの成り立ちの概念図

く、まだ〈育てる者〉の心構えを身に着けるには至っていない人、これからそのような意味での成長を遂げていく人なのだという見方ができるようになります。つまり、今日の子育て支援や次世代育成の課題の1つは、いかに次世代を育てるかというだけではなく、むしろそれと同時に、次世代を育てる親がいかに支援して真の〈育てる者〉になってもらうかということも大きな課題なのです。おそらく、子育て支援の中身も本来はそのような考え方を中心に再考されなければならないのではないのでしょうか。

3. 一個の主体として子どもが育つことが、「育つこと一育てること」の究極の目標であるという視点が切り開かれる

もう一つ、「関係発達」の視点から見えてくることは、主体として生きる〈育てる者〉が、子どもを主体として受け止めることこそ、「育てる」ことの中身だということ、しかもそれが世代から世代へと循環していくのだという点です。

これまでは「育てる」というと、すぐに子どもの身体面での成長や運動・認知面での成長を考えて、「何をさせるか」「どのように働きかけるか」と発想しがちになり、たくさん教えたり指導したりすることが子どもをよりよく育てることだと考えられがちでした。ところが子どもの心は、「優しい心をもちなさい」「人に優しくしなさい」「人を思いやりなさい」と教え込んで育成できるものではありません。子どもの心はまさに周囲の人との関係の中で、その子の思いを周りが受け止めることを通してしか育成できないのです。その基本になるのは、周りの大人が、まず子どもは自分の思いをもった一個の主体なのだを受け止め、その子もまた自分と同じように社会の中で生きる一個の主体として育つことが、育てる営みの究極の目標なのだ考えることです。

ここで「主体として生きる」ということがどういうことかが問題になります。これまで保育や教育において「主体的に」とか「主体として」などと表現されてきたのは、「自ら進んで」「自発的に」「自己発揮して」という意味、つまり子どもが「自分の思

いを素直に表現する」という意味を強調したかったからでした。確かに、自分の思いを表現できずにそれを押し殺したり、人の言うなりになるだけの生き方は決して「主体的」とはいえません。自分を自分らしく表現してこそ主体なのです。

しかし同時に、自分をしっかり前に押し出し、自分らしく表現しつつも、決して自分勝手ではなく、周りの人を尊重し、周りの人と一緒に生きていくことを喜びとするようになるというのも、主体としての生き方の重要な側面のはずです。つまり、周りの人を信頼し、周りの人と生活することに安心の基盤を求め、周りの人と一緒に行動することが自分の楽しみや喜びになり、その中で自ら進んで周りを思いやることができ、自ら進んでルールを守ることができるようになるというのも、主体であることの重要な側面だということです。そのような観点に立てば、大人とはそのような両面の意味で主体として成長を遂げてきた人だということになるでしょうし、「育てる」ことの究極の目標も、子どもがそのような両面の意味での主体となっていくことにあるといえるでしょう。逆説的ですが、自分が主体であるとは、相手を主体として尊重できるようになることを含むものなのです。そのことは冒頭の図1を考えれば分かるのではないのでしょうか。

実際、その子のしたいこと、やってみたいことを認め、それを思う存分やってみることを応援し、援助し、その結果を共に喜ぶ中で、子どもは自分をしっかり前に押し出していけるようになってきます。そして子どもは、そのように認めてくれる大人と「共に生きる」ことに喜びや楽しみや安心感を見出し、そうした大人に信頼を寄せるようになってきます。

そうすると、不思議なことに、今度は逆にそのように対応してくれる大人の存在やその人の思いを受け止め、その大人のすることや言い分を尊重する気持ちや子どもの中に育ってきます。つまり、受け止め認められてきた子どもは、今度は反転して、そのようにしてくれた大人を受け止め、認めることができるようになっていくのです。そしてその結果、周

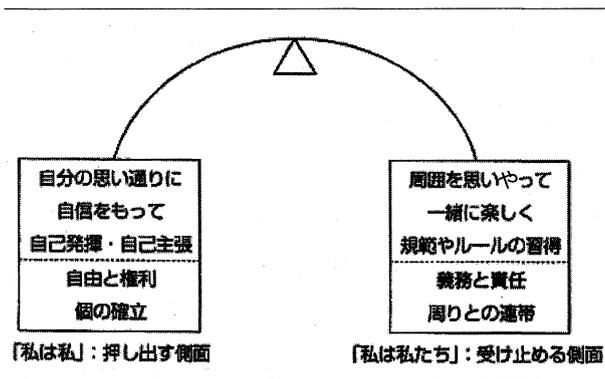


図5. 一個の主体であること2つの側面

困の人と気持ちよく共に生きていくために、時には相手が喜んでくれるように自分を譲るということもできるようになり、こうして真の主体としての生き方が身につくようになるのです。

要するに、主体として生きるとは、一方では「私は私」という形で自分を押し出すこと、他方では「私は私たち」ということに気づいて、周りの人を主体として認め、尊重することをバランスして生きるという意味です。これを図示したのが図5です。

この図からわかるように、真に主体といえるのは、単に自分を押し出せるということではなく、周囲の人を主体として受け止めることができ、周りとの連携して生きることができるようになることを含むものです。もちろん、幼児期の主体としてのありようから、大人の主体としてのありようには、当然ながら大きな変化が含まれてきます。しかし、そこに「育てられる者」から「育てる者」への育ちの根本があるのであり、そしてそれが世代から世代へと循環していくと考えるのが「関係発達」の基本的な視点なのです。

このバランスがいまわが国の大人において大きく崩れているように見えます。私の考えでは、そのことが「育てる」ことの根本問題を引き起こしているのではないかと思います。図5を念頭に置くと、子どもの「心の教育」を語る前に、親はもとより、保育者や教師をはじめとする大人たち自身の「心の教育」がまず必要だと思います。それには、大人自身がまず自分の「主体としての生き方」を反

省し、そのバランスの回復を目指すことが急務だと思います。

4. 人間関係を相互主体的な関係として見る視点が切り開かれる

いま、子どもや青年を見るときに、これまで見てきたような意味での主体としての育ちが十分ではありません。このことが対人関係の営み方に端的に表れてきているように見えます。「寄り添う」とか「思いやる」とかいう言葉は最近しばしば耳にされますが、それがどのようなことかがなかなか分からないのです。そのポイントは、「主体として受け止めてもらってきた人が、相手を主体として受け止める」というところにあります。誰しも主体として受け止めてほしいし、受け止めてもらえれば嬉しいでしょう。自分がそうであるように、相手もそうなのです。一人の人間が主体であるとは、図5の「私は私」の“押し出す側面”が育つだけでなく、相手を主体として受け止め、相手を主体として尊重することができて初めて主体なのです。そのことが図5の「私は私たちの」“受け止める側面”に通じています。

看護の場でも養育や保育と一緒に、看護する側が正しいと信じることを一方的に与えるのが本当のケアではないはずです。患者を一人の主体として受け止めることが看護のもっとも重要な部分でなければなりません。それには、自分自身が言葉の正しい意味で一個の主体として成長していること（成長しつつあること）が必要でしょう。

VI. おわりに

私は看護実践をより豊かなものにしていくためには、看護の場でのさまざまな経験をいくつかのエピソードにまとめ、それを職場でお互いに検討し合うことが大切だと思っています。というのも、看護は主体と主体の関わりである以上、「こうした」「こう言った」という目に見える行動ばかりでなく、「相手の心がこのように動いたからこうした」「自分の思

いをこのように伝えた」ということが含まれてくるからです。しかも、その相手の思いを受け止め、こちらの思いを伝えるという看護の、ある意味でもっとも重要な機微は、周囲には目に見えず、当事者にしか体験できないことです。そこに、その目に見えない営みをエピソードに綴り、周囲の人に読んでもらう（分かってもらう）ことが必要になる理由があります。

しかしながら、これまでは客観科学という強い枠組みの下に、看護のその営みがエピソードに綴られることは稀だったようです。それは「主観的だ」と思われたからでしょう。しかし、人の生き様にじかに接して、さまざまな感動や気づきを得て日々仕事をしているのが、看護や保育、教育、介護などの人

を相手にする職種の人たちではないでしょうか。その意味で、私は現場の人にエピソードを描くことを勧めています。それは、日々のその経験をもつ人が主体としてその場を生きているからでもあります。

参考文献

- 1) 鯨岡峻：〈育てられる者〉から〈育てる者〉へ，NHKブックス，東京，2002
- 2) 鯨岡峻：エピソード記述入門，東京大学出版会，東京，2005
- 3) 鯨岡峻：ひとがひとをわかるということ，ミネルヴァ書房，京都，2006
- 4) 鯨岡峻・鯨岡和子：保育のためのエピソード記述入門，ミネルヴァ書房，京都，2007